

小川国夫

悠蔵が残したこと

角川文庫

昭和四十八年一月三十日 初版発行
昭和五十一年四月三十日 四版発行

定価は、カバーに
明記してあります

角川文庫

悠蔵が残したこと
ゆうぞうのこ



著作者 小川国夫
おがわくに お

発行者 角川春樹

印刷者 中内佐光
東京都文京区関口一ノ二四ノ八

発行所

東京都千代田区富士見二ノ十三
①一〇二②東京③一九五二〇八

株式会社 角川書店
電話東京(265)七二二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

暁印刷・多摩文庫

0193-131103-0946(1)

悠蔵が残したこと

他 八 篇

小 川 国 夫

角 川 文 庫

2991

目次

悠蔵が残したこと	五
影の部分	六
違約	六
サラゴサ	六
大亀のいた海岸	二四
アフリカン・ナイト	二三
港にて	二五
河口の南	二八
入江の家族	三三
後記に代えて	二五
文庫版あとがき	二五
解説	二五

森川 達也

二五 二五 二五 二五 二五 二五 二五 二五 二五 二五

悠蔵が残したこと

——丹羽正に——

悠さんと二人で、バスで家を見に来た日には、一かけらの雲もなかった。そして西風が吹きまわっていた。海一面に波頭の大群が輝き、その波の穂が、行く手の道を濡らしているところもあった。

場所を見た時、わたしはがっかりした。あんまり吹きっさらしだった。

——海の上よりかましかも知れないけど、とわたしがいようと、

——そうだ、船で沖へ出ていることを思やあ、なんのことがあらすかえ、と彼はいった。

——そんなことを思って我慢するの、とわたしは笑ってしまった。

家の裏手には、遠く、割れ石がおおった斜面が見えた。石切場から出る屑が流れているのだ。

——そうだ、義理にも賞められやせんもの、とあの人はわたしに調子を合せていた。

——もうちょっと、どうかいとうところは……。

——買えるところを買ったときやあええ、そのうちに買い変えりやあええだんて。

買い変えるつもりでいたのか、どうか。

家の前には大きなシャボテンが生えていた。所々が茶色に固くなってしまったこの植物は、強情なだけにかえって脆い感じの男のように思えた。

あの人は自分の家に長くは住めなかったわけだ。石の捨て場がうとうしい、というのはあの人のいう通りだった。

あれも寿命なんだから……。でも、あんな死にぎわになってしまったことは、気の毒だった。もしわたしさえ父と子の間にいなかったら、あの人は真一さんに看病してもらって、息を引きとったに違いない。

言葉なんか、それをいった本人がいなくなってしまうえば、それほど力のあるものではない。言葉は盾にとるといふようなことも、考えて見れば、残った人間の意志なのだ。それに、真一さんが家を継いで一人前にやって行けば、死んだ人にとって悪いことのはずがない。わたしなんか二人の間にまぎれ込んで、家を横取りしてしまったらおかしい。あの人はわたしの心を自分にながうとして、家をゆずる、といったのだが、いいながら後悔したに決っている。

彼はわたしを誤解している——などといっても始まらない。家、家、と私は家のことばかり考えていたが、家なんかは、彼にとってむしろ小さなことだ。父親が急死したところ、彼にとっ

てはにがい思い出なのだ。死んだこと自体は仕方がないにしても、あんなふうに関係がこじれたまま、父親が死ぬということは、不運なことだ。親だって一遍しか死にはしないのに。

わたしの方も肝心なことはいってしまった。もっということがあるつもりで、彼のいる船まで行ったのだが、結局、大していうことはなかった。彼はそっけなくて、わたしをそんな具合にしてみよう。わたしがそれまでいろいろ考えたことが、彼と面と向うと、大方は余分のことのように感じられて来る。

——解っていることだから、今更口に出していわなくなつて、と口実をこしらえたりした。でも、刃物でここを切るのだと解っていたって、実際に力を籠めて切らなかつたら、意味がないじゃないか。

わたしが悠さんの所へ来てすぐに気づいたことだが、真一さんはよく蒲団を汚した。毎晩のように新しい汚れをこしらえた。それで、洗ったタオルを畳んで、なに気ない感じに彼の蒲団の襟へ乗せておいた。どんな動機であんなことをしたのか。ただ洗濯が面倒だから、などと考えただけだろうか。

わたしも臆面もない女ではないつもりだが、真一さんは信じられないほど羞恥が強い性質だ。翌朝彼の蒲団のそばへ行つて見ると、畳んだタオルが枕もとの壁の真下の所に、なかば開いて、

つつ立ったような形で落ちていた。タオルを彼は壁にぶつけたらしいのだ。それは確かにわたしを咎めていた。そのことはタオルの白さのようにはっきりしていた。わたしは平静ではいらなかった。

その日の昼食に彼は戻って来た。悠さんは作業場が遠くて、お弁当を持って出ていた。わたしは真一さんの顔を見ると気後れしそうになった。わたしは自分に抗って振る舞った。食事が終るとわたしは、彼の髪が汚れているから洗ってやる、といった。彼はなにか感じた表情をした。わたしをみつめたが、ぎごちなくうなずいた。流しに頭をさし出した彼は、体を固くして、わたしの手から逃がれたがっていながら、それが出来ないでいるようだった。

あとから久枝さんに聞いたことだが、第三太紋丸の狭い船室で彼が自分で終らせたのを、盗み見た友達があつて、彼女のお店で、笑いながら話したそうだ。あのことと、別に、結びつきはないだろうが……。

わたしは彼と接吻することを想像したことがあつた。彼のぎごちない接吻の仕方を想像した。七年前、わたしはそんな接吻をしたことがあつた。相手は十八の人だった。前歯だけが石のようにかチカチと触れ合つて、お互の唇が遠くてもどかしい気がしたが、どうにもならなかった。わたしにはそんな接吻は一度限りだった。そして、もし真一さんと接吻したら、この人はきっとそんなふうにして来るだろうと思えた。その場合、わたしの唇が彼の硬い唇を受けとめてやるこ

とを考えると、胸が痛くなる気がした。

真一さんとわたしでは、気にし方がお互に違っているように思えた。わたしの方は彼を肌（はだ）に感じていたが——特にわたしは彼のこまかい癖に出合うのが好きだった——彼の方はわたしを避けるようにして、自分一人でわたしのことを考え、想像している、というように思えた。つまり彼は自分の心の暗がりの中に——そこは澱（よど）んだ夜の入江のように思えた——わたしという人間を住まわせている、というようなことだった。こうしたうぬぼれが自然とわたしの心に湧（わ）いた。

はつきりいって、わたしは彼が身近にいるから、毎日気に張りが感じられた。でも、同時に怖かった。自分の置かれた立場が頭を離れなかったのだ。そしてわたしは心の中の一人相撲（ひとりずもう）に疲れ、てしまつて、かえって、悠さんの変哲もない退屈さに憩（い）いを感じた。

わたしは体をふるわせて叫んでいたが、あの人は柔和に笑っていた。

——いつになったら、あなたはどっかへ行ってくれるの。

——どっかって……、どこだ。

——あなた、そんなところからわたしを見ているじゃないの。

——見ちゃあ、悪いんか。

——あなたって、なぜわたしを離してくれないの。

——離すも離さないもないじゃないか。そんな事を考えているのは、お前だけだぞ。

——嘘、わたしだけなもんですか。

——嘘いってなんになる。お前はおかしな女だな。俺は、好きなようにすりゃあええって、いつてるじゃんか。

——わたしは實際をいつてるわ。

——神経だよ。なに實際なもんか。

——いいから、わたしから離れて。

——このまんまでええよ。

——いいはずなんかない。

——そんなら、お前も死んだらええ。死んで俺んとこへ来りゃあええ。疑りっぽいのは、お前がそんなところから俺を眺めてるからだ。

——わたしはあんな苦しい思いをして死ぬの、いやだ。怖いわ。死ぬまでには、もう死ぬより他に仕方ないと決ってから、なぜあんな思いをしなきゃならないのかしら。

わたしは眼を醒ました。夢の中へ眼を醒ました。つまりわたしは二重の夢を見ていた。

あの人の顔が消えた瞬間、嬉しいと思った。今までわたしがむきになっていい張っていたことが、自然にかなえられた気がしたからだ。でも、その気持は妙に事実とよじれ合って、わたしはあの人死んで、いなくなることまで喜んでいるような錯覚を起こしていた。

なぜあんな夢を見たのか。なんにも意味のない夢だった。夢の中でわたしは十代の小娘のように幼稚に、ただおびえていた。夢はわたしにとって、入江から鷺が次々に飛び立つようなことだった。羽の動きが眩しく、キクキクいう関節の音まで聞えるようで、息がつまりそうだった。そして眼が醒めて、氣持が落ちついて来る時には、その驚がどこからともなく、一羽一羽、静かに砂地へ戻って来るような感じがした。わたしは、それではなぜ群は舞い立ったのか、と考えて見た。原因はなにもなかった。ただ最初の一羽がはばたいたということが、全部がはばたいた原因だった。それは不安ということを示しているんだろう。

時計を見ると、零時十分前だった。久枝さんのところへ行こう、とわたしは考えた。彼女は港でバーをやっていた。わたしはそこへ行行って、しばらく話してこようと思ったのだ。

起きて裏の戸口まで行った。その時はじめて気づいたのだが、外はひどい雨で、真暗だった。眼の前を容赦なく雨脚がふさいでいるだけで、他にはなにも見えない。でもわたしはためらわなかった。雨はわたしのその夜の行きがかりを、打ち切りにしてくれそうだった。

わたしは軒から足を踏み出しながら、傘を開いた。——なにげなく腰板の所へ手を伸ばすと、傘に触った——。たちまち着物の裾が濡れて、脚にへばりついて来た。そして肘をシャボテンの棘が擦るのが感じられた。雨に氣をとられていたから、痛みは微かだった。でも、その痛みでわたしは眼を醒ました。その時までの感覚が、砂の上の水溜りのように消えて行って、わたしは夢

の境を越えた。

わたしは矢張り久枝さんの所へ行こうと思った。時計を見ると、零時までまだ二十分あった。洋服に着かえ背戸へ行くと、外は静まりかえっていた。雨なんか降っているはずはなかったのだ。澄み切ったお月夜だった。明るくて、シャボテンの新しいきれいな葉には、棘が一本一本見わけられるほどだった。割れ石の流れがおおっている崖^{がけ}は、こっちへ近寄ったように見えた。

わたしは放水路に沿って町へ入って行った。陰った路地へ入っても、いつもどこかを区切って、光が射しているのがわかった。

久枝さんのお店は閉っていた。お客がなくなつて、警察の達し通り看板にしたのだろう。呼んで見た。でも返事がなかった。引返した。寝ついたばかりのところを、起こすのも悪いと思つたからだ。

わたしはまた放水路に沿って、元の道に戻って行った。石切場は遠くに、白っぽい船のように浮き出して見えた。水路の水面まで月の光は届かなくて、真直^{まっすぐ}に地面を区切っている裂け目のようだ。それがわたしを導くようにも感じられたが、とにかく、わたしは家へ帰っても仕方がなかったのだ。久枝さんを起こさなかったことを、後悔したりした。若しかしたら、いい人と一緒なのかも知れない、などと知りもしないのに考えたりした。

心が決らないままに歩いていった。決めようとも思っていなかった。鋳^{いも}物工場の横を歩いていった時、わたしの行く水路の縁を、向うから急ぎ足で来る男が見えた。やがて、齒^{くは}切れのいい靴^{くつ}の音

が響いて来た。青年だった。彼はわたしの前に立ちふさがるように足を止めた。途が狭くて、わたしも立ち止らざるをえなかった。

——なにしていたんか。こんな、遅くまで、と彼は声をかけて来た。彼はわたしよりよほど年下に見えた。真一さんの年恰好としかつこうに見えた。

わたしは面倒くさい気がした。女に対する若い男のこんな仕草は、ここに住んでいれば別にめずらしいことではなかった。

——どこで遊んでいたんか、と彼がいった。わたしは返事をしなかった。

——楽しかった……。

——……………。

——送って行かっか。

彼は近づいて来た。わたしは水路と反対の側へ寄って、彼をかわそうとした。彼は硬い二の腕を擦りつけて来た。

——歩こうや、一緒に。

わたしはようようすり抜けた。すると後で彼が笑った。わたしが足をくじきそうになって、妙な恰好に見えたからかも知れない。かまわず歩いて行くと、彼は追いかけて来た。二人の足音が一致したり、前後したりした。彼は追いついて、肩をひっかけた。わたしは千鳥足になった。

彼はまたわたしの前に立ちふさがり、顔を覗き込みながら、わたしが歩くにつれて、数歩あと

ずさりした。その時までにはわたしにわかったことは、彼はおどけて見せているだけで、内心は真剣だということだった。臆したところ、はやったところが感じられた。

——よして、といってわたしは、彼と水路の間をすり抜けた。彼の肘——だったろう——がはずみで腋わきに当り、息がつまりそうに痛かった。彼は手頸てくびをとろうとした。わたしは振りはらって駆け出した。彼も大股おおまたにわたしのすぐ後を駆けていた。彼がその気になれば、わたしは掴つかまるだけにはたやすく掴つかまったろう。でも彼は、それなり手を伸ばそうとはしなかった。きつと、大袈裟おおげさな感じになったのに、氣後れしたのだろう。

背戸へ着いた時には、彼はもう追っては来なかった。わたしは錠を開けて土間へ入り、振り返って見た。彼がふてくさった恰好で橋を渡り、放水路の堤から向う側へ下りて行くのが見えた。瘦やせた肩を振り振り、砂利を踏みじじる足どりで、下りて行った。

大方舟方だろう、とわたしは思った。

しばらく、澄み切った空を見ていた。波の音は一つ調子で、大空へ抜けていた。わたしはそれだけを聞いていた。

この土地が、限られたほんの片隅かたすみだと感じられた。そして、波の音のしない土地のことを思い出した。もう一度、そういう土地へ戻れるだろうか、と考えた。自分の心一つで決ることなのに。

この町で人妻を奪い合った、まだはたち過ぎたばかりの青年があった。火遊びの結果だった。二人の青年は真夜中に伝馬てんまを漕いで沖へ出、舟の上で、もしかしたら海の中で、刃物で渡り合い、一人が死んだ。二人は同じ鮪漁船まぐろの乗組だったが、おかにいる間はよく外泊したので、——それに、気紛れきまぐれに船を逃げる舟方も、時々あったので——行方不明者ゆくえもそれとして扱われず、捜査もされなかった。十日くらいして、生き残った方の青年が自首すると、たちまち事のなり行きが大っぴらになった。わたしにはその人妻も二人の青年も顔見知りだった。それに、死んだ青年と同じ年だった。

悪いのは女の方だと思った。そして、若い男の死というものは、本当に簡単だと思った。あんな女一人のことで、スバリと若木を切るようなことになってしまふんだ、と思った。

この港町を去ろう、と心を決めた。家のことは、真一さんの意向に関係なく、わたしは権利を捨ててしまおう。勿論もちろん、そんな法律もあって、届ければ通ることなのだろう。その上で、この町からは出来るだけ早く——出来たら三、四日うちに、立ち去ろう。

立ち去る段取りを考えていると、涙が出て来た。わたしはあの青年に、丁度ゴムでつながれているようだった。だから、ゴムが効果を失う所まで、どんなに引っぱられても、彼から離れてしまわなければならぬ気がした。やがてゴムは臍抜けへらぬけになって、嘘のように彼のことを忘れていられる時が来ることを、待つより仕方なかった。